

八幡製鉄戸畑製造所，若戸大橋見学記…………… 37年 11月 2日

学会の研究発表が終了した後、見学会を催すという事は、何時ごろから始まったことなのだろうか。今ではどの学会でも慣例になっているように思う。

大へんに結構なことである。疲れた頭を休ませたり、緊張した精神を休ませたり、また、高名の先生、学者に気軽に話しかける機会を多くもつことができたり、さらに、知らない土地を見学し、専門外の工場を勉強したりする。その収穫たるや多大である。勤務先もちがいが、生年月日もちがうけれども、OR という学問？ にたづさわる同憂同患の土が懇親するというのも、まことに価値のある「えにし」である。と、こんな感想をもちながら筆者は、日本銀行福岡支店前へと急ぐ。昨夜、同じ旅館に泊り合わせた友らと駄弁り、酒を掬んで、夜の情緒を楽しみすぎたゆえか、朝はねむい。10時の集合時刻によく間に合う。

やはり、同じように眼い人が多いせい、定刻に遅れる方々が多数、幹事気をもむ。空は昨日、一昨日とうってかわって、今にも泣き出しそう。バスが一杯となって出発に移るころ、ポツリポツリと大粒の雨。

美しい車掌さんが沿道の風景の説明をしてくれる。道はよくほ装されていて快適、車は戸畑へ急ぐ。やがて説明することもなくなった紅一点の車掌嬢は、「どうぞ、皆様のかくし芸を」とマイクを車内にまわす。酒ものまずにうたえるかい。芸などはなんと恥ずかしいことよ。と思ったのは筆者一人だけではあるまいと思う。ここかしこでマイクを譲り合う美德が見られる。それでも後の席から前へ順順に歌や演説が動いてきて、東工大の渡辺浩さんがユーモアにとんだ難クイズを車内の賢男子達に提供するころ、車はようやく戸畑市に近づく。かつ、雨は幸いにもやむ姿勢をみせる。

製鉄所の会館とおぼしきところで休憩、昼食の饗応にあずかる。ビールもあったことは嬉しいような、困ったような仕儀。赤い顔しては工場見学というものも恥ずかしさかろうと思う故に他ならない。

食後、八幡製鉄所が業界に占める位置、戸畑製造所の沿革、業務、製鉄製鋼の方法などのくわしく懇切な御説明がある。また、若戸大橋の概要を道路公団の技師の人がのべられる。そして、われわれは期待をもって再びバス車上の人となる。

百聞一見にしかず、さすがに戸畑の工場の敷地は広い。工場から工場へと大型バスは移動し、われわれ

は降りたり乗ったり。

出鉄の様子、とけた鋼が湯道を通ってとり鍋に注がれるときの火花と紅い色の美しさ、そこに働く人々が黙して汗をふく姿の男らしさ。熱間圧延の一貫工程を工場の高い所につくられた見学通路を歩きながら見たときの胸ふるいに似た感銘。これらの風景の中には科学と技術との苦斗のあとが偲ばれ、われわれに同志愛を呼びおこす。

筆者は製鋼所をはじめ見たわけではないので、やや落ちついて作業工程をみつめ、工場の配置などにも注意を払ったが、機械工業以外を職業とされる方々には恐らく生れてはじめて製鋼を見る人があったように見うけられた。「全く素晴らしい」と語り合う声がきかれたのである。雨はやんでいて。巨大な熔鉱炉と赤茶けた煙を後にバスは若戸大橋へ。

筆者は過去において2回この橋の建設現場を見ていた。橋脚をつくりつつあるときと、吊りワイヤーを張っているときとである。しかし、完成された立派な姿をみると、やはり感嘆の呼びをあげずにはいられない。見事なり土木技術！

まず、バスのままで戸畑から若松へ。若松で下車して、エレベーターで橋の上にあがり、われわれは三三伍伍歩いて再び戸畑へ。雨はやんだけれども水気を含んだ風は洞海湾を吹いてきて、おのぼりさんである見学団の一人一人の髪を乱して去ってゆく。ここでも、科学と技術とに対する畏敬と、技術者と労働する人々への親愛感とがわれわれの胸をうずめる。近代の工学が近代の美をつくる。筆者は同輩の一人にこう語った。橋の上からは若松の人家の屋根が見渡せ、戸畑の諸工場の煙突が数えられる。また遠く煙って若松市のはるか彼方に外洋が望まれる。北九州市となる胎動がじかに伝わって来るように感じられる。

橋を渡って、戸畑の土地をふんで、見学は散会となる。ある人はバスで再び博多へ。筆者らは東京へ。又会う日までという哀感はないが、一日の同行で生れた友愛が別れに際して人々にさよならを云わせたのである。

見学会の実施についてお骨折をいただいた戸畑製造所の方々、道路公団の方々、紙上をかりて心からのお礼を申し上げて、見学記の終りとしたい。

(ト舜部一記)